

歩を譲り律令の五教が孟子の五教の意味でないにしても律令に於ける道德體系は孟子の五教説を以て中心とし、必要に應じ種々なる徳目を附加して組織したものと云ひ得るのである。即ち父子有親、夫婦有別を以て家族徳道を中心とし、長幼順序と朋友有信を以て社會道德の中心とし、君臣有義を以て國家道德の中心となしてゐるのである。換言すれば五倫の道なる儒教道德の體系を以て律令の道德を體系づけたのである。かく見る時に實に我が國民道德は組織體系に於て如何に儒教道德の影響を受けたかと云ふ事を律令を通して見た丈でも知る事が出来るのである。

(終り)

楚辭遠遊篇作成年代考

上 島 一 夫

一、

所謂楚辭の一篇たる「遠遊」篇が、古來屈原の所作なりとして、多くの楚辭舊注家に認容せられ來つたのは、もと後漢の王逸の「楚辭章句」に、「遠遊者、屈原之所作也。」(「遠遊序」)と云へるに基付けるものではあらうが、併し遠遊は、其の行文の態様に於いて、離騷に倣ひこそすれ、其の詞意・文義に於いては、離騷・九章等、眞正の屈原辭賦に咏出せられたる彼の口吻志意と、殆ど全く相反して、宛かも別手に出づるが如き趣を呈示せるが故に、王逸説を墨守遵奉せる諸注家も、こゝに稍々疑惑を懷かざるを得

ざるに到り、従つて此が注解に當つては、稍、其の所見を異にして、等しく附會に互るを免れ得なかつたが如くに思ふ。

即ち諸家の、此が作意を推考せる一端を一瞥してみても、先づ王逸が、

「屈原履方直之行、不容於世。……章皇山澤、無所告訴。乃深惟元一、修執恬漠、思欲濟世。則意中憤然、文采秀發、遂敘妙思。」（楚辭章句遠遊序）と云へるに、その附會の端緒を開いて、聽て朱子も、

「屈原既放、悲歎之餘、眇觀宇宙、陋世俗之卑狹、悼年壽之不長、於是作爲是篇。」（楚辭集注遠遊序）と述べ、遂に近人謝无量をして、

「案遠遊是後來游記傳所從出、可見屈原晚年超人間的思想。」（楚詞新論）と叫ばしめて居るのであり、更に清初の王夫之は

「此篇所賦、與騷經卒章之旨略同、而暢言之。」（楚辭通釋遠遊序）と説けるに拘はらず、我が岡松篁谷は、
「此篇乃繼悲回風而作也。」（楚辭考遠遊序）と言へるが如き状態である。

而も異説の尤なるものに到つては、正に此を屈復の楚辭新集注に求む可く、彼はこゝに説いて、

「遠遊寓言也。自沈汨羅、即是遠遊、遠遊之樂、即是自沈之樂。……明是寫自沈之樂。」（遠遊序）

と云つて居るのであつて、此が當否は暫く措くにしても、其の説の新奇は略、人の耳目を驚かすに足るであらう。

かくの如く、諸家の注解、時に或は一部相通ふも、時に或は全く相背致して、各、異見を逞しうせるに到つたるは、抑、本篇を取つて、飽迄も屈原の作品と認定するに因由する牽強の故ではあるまいか。

されば近代の學徒は、先づ疑をこゝに發して、此が文義の檢討と、及び他の屈原辭賦との比較考量を試み、遂に此を離騷の倣作と疑ひ、後世の僞作と推定するに到つたのであつて、之が先鞭を附けたるものは、彼の碩學胡適の「讀楚辭」（注1、）一篇であらう。尤も胡適は、

「遠遊是模仿離騷倣的。……全是晚出的仿作。」との推測を下したるのみで、その論據に就いては一言の述ぶる處もないのであるが、次いで、陸侃如・馮沅君・陳鐘凡・游國恩・鄭賓于等（注2、）は、各、相承けて此が後世の僞作たることを論證し、然もその言ふ所は、甚だ舊説の誣ゆるに勝るが如く感ぜらるるのである。

依つて、私はこゝに彼等の所説を參照しつゝ、此が後代の僞作に外ならざることを論定し、此を屈原辭賦の圈外に放逐しようと思ふ。

（注1）「胡適文存」二集卷一、讀楚辭篇參照。

（注2）陸・馮二氏著「中國詩史」上卷、楚辭時代。陳鐘凡「楚辭各篇作者考」、中國語文學系期刊、創刊號。

游國恩「楚辭概論」第三篇第九章。鄭賓于「中國文學流變史」上冊、第二章第二節、等參照。

二、

擬、「遠遊」は、その形態に於いて、既に離騷に模倣せるのみならず、又その詞意に於いて、甚だ離騷篇中の神遊憧憬の個處と相類似し、嚮に王夫之の云ひたるが如き離騷卒章の旨と承應して居るのであるが、更に此が篇中の字句を探れば、相互に類似せる幾多の句例を抽出し得るのであつて、こゝに「遠遊」は離騷を底本と爲し、その字句を離合鈔襲して模作せられたるものに非ずやとの推定が下さるゝことゝ

なるのである。即ち胡先煒（注一）「游國恩等に従つて、今特に著しき兩者の類似句相の一斑を列舉してみても、

『遠遊』

1、「哀人生之長勤。」

2、「願承風乎遺則。」

3、「聊仿佯而逍遙兮。」

4、「恐天時之代序兮、……………」

春秋忽其不淹兮、

奚久留此故居。」

5、「朝濯髮於湯谷兮、

夕晞余身兮九陽。」

6、「載營魄而登霞兮、

掩浮雲而上征。」

7、「命天閭其開關兮、

排闥闔而望予、……………」

叛陸離其上下兮、

遊驚霧之流波。」

『離騷』

「哀民生之多艱。」

「願依彭咸之遺則。」

「聊逍遙以相羊。」

「日月忽其不淹兮、

春與秋其代序、……………」

又何懷乎故都。」

「夕歸次於窮石兮、

朝濯髮乎汧盤。」

「馳玉虬以乘鸞兮、

溘埃風余上征。」

「紛總總其離合兮、

斑陸離其上下、

吾令帝閭開關兮、

倚闥闔而望予。」

8、「朝發輟於太儀兮、
夕始臨乎於微闕。」

9、「屯余車之萬乘兮、
紛浴與而並馳、

駕八龍之婉婉兮、
載雲旗之逶蛇。」

10、「涉青雲以汎濫游兮、

忽臨睨夫舊鄉、

僕夫懷余心悲兮、

邊馬顧而不行。」

「朝發輟於蒼梧兮、
夕余至乎縣圃。」

「屯余車其千乘兮、
齊玉軼而並馳、

駕八龍之婉婉兮、
載雲旗之委蛇。」

「陟陞皇之赫戲兮、

忽臨睨夫舊鄉、

僕夫悲余馬懷兮、

蜷局顧而不行。」

の如く、多數を挙げ得るのであつて、其の他、少々の文義・語氣の類似に到つては、一々對比の煩に堪

ずべであらう。



固より、離騷の詞句は、時に九歌と出入し、又九章の中にも數例の類似相を認め得るのであるが、併し此の「遠遊」篇に、特に右の如く多數の類似句の存在せるは、反つて此を同一人の作と認定するに躊躇せしむるものであり、且つ又、陳鐘凡の云へるが如く、篇中の語詞の、更に九歌・天問・九章・七諫・哀時命・山海經・老子・莊子・淮南子・大人賦等に類似せるは、益々、此が疑問を強化し來たるのである。

而して、右記諸書の中、最もその類似相多き大人賦との關係に就いては、夙に朱子が

「司馬相如作大人賦、多襲其語。然屈子所到、非相如所能窺其萬一也。」（楚辭集注遠遊篇）

と述べて、遠遊こそ大人賦の母胎なるが如く推考して居るのであり、甕谷、岡松辰も亦此に賛して、「是亦真知三閭者矣。」（楚辭考遠遊篇）と説いて居るのであるが、併し二者の先後、本末の關係は遽かに論定し得ざる處であつて、陸侃如・馮沅君・陳鐘凡・游國恩等の近代學究は、反つて遠遊を以て大人賦を鈔襲したるものと爲して居るのである。即ち彼等は、大人賦の作者司馬相如が、文學史上第一流の天才辭賦家なること、大人賦は、辭賦に長ぜる武帝に獻じたるものなること、及び相如自ら大人賦を以て、子虛・上林等の賦に勝ると認め居たること等を舉げて、此が論據と爲して居るのである。

寔に彼等の言ふ所は、甚だしく誣ゆるものに非ざるを感ずるのであるが、併し吾々は、唯此の對比のみを以て、直に兩者の本末は辨定し難く、寧ろ廖平に従つて、「遠遊篇與司馬大人賦、如出一手、大同小異。」（楚辭講義）（注2、）と言ふの安易なるをすら覺ゆるのである。

（注1、）（注2、）共に陳鐘凡の「楚辭各篇作者考」（中國語文學系期刊、創刊號）に引用せらる。

三、

かくて此處に吾々は、進んで本文に就いて、其の内容を検討すべき必要に迫られるのであつて、作家を圍繞し、その胸中に脈々と波打つ時代思潮は、必ずや作品の上に表現せらる可く思惟せらるゝが故である。

然らば此の一篇に溢れたる、出世間的の神仙思想は、既に陸侃如・馮沅君・鄭賓于等の論じたるが如く、（注1、）屈原の他篇に咏出せられたる、入世間的なる牢騷思想と、甚だ趣を異にして居て、假令離

騷に見る神遊思想とは、一部相通ふ所ありとしても、其の究極の意思の全く相反せるに依つて、之を屈原作に附會し難いのみならず、又その寓言と見らる可き遊僊の説は（注2）宛かも秦漢の際に盛行したる方士一派の思想と、略、異る所無きが如くである。

即ち或は

「貴眞人之休德兮、美往世之登仙、與化去而不見兮、名聲著而日延。」

と言ひ、或は

「奇傳說之託辰星兮、羨韓衆之得一、形穆穆以浸遠兮、離人羣而遁逸。」

「因氣變而遂會舉兮、忽神奔而鬼怪、時髣髴以遙見兮、精皎皎以往來。」

「超氛埃而淑郵兮、終不返其故都、免衆患而不懼兮、世莫知其所如。」

と咏じ、更に或は、

「飡六氣而飲沆瀣兮、漱正陽而含朝霞、保神明之清澄兮、精氣入而麤穢除。」

と言ひ、

「聞至貴而遂徂兮、忽乎吾將行、仍羽人於丹丘兮、留不死之舊鄉、」

と言へるの類、既に游國恩も論ぜるが如く、凡べて方士の口吻に外ならざるものであつて、嚮に王夫之が、

「所述遊僊之說、已盡學元者之奧。後世魏伯陽・張平叔所隱祕密傳、以詫妙解者、皆已宣洩無餘。……故以魏張之說釋之、無不脗合。」（楚辭通釋・遠遊序）

と釋せる所以も、こゝに見る可く、鑢て此が作成の時期を、方士の流行したる秦漢の際に求むるに至るは、極めて自然の事であらう。

然も、こゝに言へる韓衆が、史記始皇紀に所謂方士の韓終と同一者なりとせば、右の推考は益々確實なる根據を得ることとなるのであり、陸氏・馮氏等は強く此を主張して居るのであるが、併し私は、夫にも拘はらず、遠遊篇の韓衆は古代の方士であつて、後に秦時の方士が亦此の名を襲ぎたるものと爲せる甕谷の説こそ、(注3、) 妥當なるものには非ずやと思ふ。況んや列仙傳には、既に齊人韓終と云へるに於いてをや。(注4、)

併し乍ら、古代方士の名稱を再現するに至らしめたる當時の社會は、自ら方士に對して多大の關心を有したる可きことを立證して居るのであつて、秦漢の風氣の一斑は、こゝに窺ひ得るのであり、嚮の推定を覆へすには到らないのである。

然るに此の韓衆傳説は、漢初に到つて、東方朔の「七諫」中に賦述して、

「聞南藩樂而欲往兮、至會稽而且止、見韓衆而宿之兮、問天道之所在。」(自悲)

と言はれて居るに見れば、元來屈原の辭賦に倣つて「七諫」を作成したる東方朔は、「遠遊」を認めて屈原の作品と爲し、依つて以て韓衆傳説を信じたる可く想察せられぬこともないが、併しその行文の意に照らせば、彼は遠遊に依據したるものには非ずして、唯當時傳承せられて居たる方士傳説を取入れたるに過ぎぬが如く思惟せられるのであつて、恐らくは遠遊と七諫との間に、母子、本末の關係は存せぬであらう。

こゝに於いてか、吾々は再び立返つて、更に遠遊篇を探るに、或は「虚静」「無爲」「得一」「自然」といひ、或は「無爲之先」「此徳之門」「載營魄」といへるは、全く黄老の説に基く語氣なるを看得するのであるが、眞正の屈原の辭賦中には、毫も黄老に服せる形迹なきに見れば、恐らく此が作成は、黄老説盛行の際にある可しとも疑はれて來るのである。されば游國恩は、老子が南方に出でつゝも、其の初め屈原時代の思想界には殆ど影響する所なく、漢初に到つて漸く一般世上に尊尙せられたるものなることを例證し、(注5、)従つて遠遊篇の作成も漢初にある可きことを示唆して居る。老子その人、並びに老子の書物に就いては、古來注家の言ふ所、必ずしも其の歸を同じうするものではないが、併し黄老説が、西漢の初葉に於いて頓に盛行し、或は黄白の術となり、或は練丹の術となり、或は避穀導引の術となり、遂に或は神仙長生の術と合し、方士の託言する處となり、道教の發生を見るに到つたことと思ひ合すれば、遠遊作成の時代が、こゝに想察せられぬこともなからう。

(注1、) 陸侃如・馮沅君共著「中國詩史」上卷、第三篇楚辭時代、及び鄭賓于著「中國文學流變史」上冊、第二章第二節、參照。

(注2、) 朱子曰、「雖曰寓言、然其所設王子之詞、苟能充之、實長生久視之要訣也。」楚辭集注遠遊序、
(注3、) 甕谷曰、「史記始皇紀、今聞韓衆竊按、史記衆作終也、去不報、徐市等費以巨萬計。始皇在屈子後百餘年。蓋

古有韓衆。秦時方士亦襲此名也。」楚辭考、遠遊篇)

(注4、) 洪興祖曰、「列仙傳、齊人韓終爲王採藥、王不肯服、終自服之、遂得仙也。」楚辭補注、遠遊篇、
(注5、) 游國恩「楚辭概論」第三篇第九章、參照。

四、

寔に、以上の所見にして多く誤らずとすれば、「遠遊」は秦漢以降に於いて作成せられたる可く推測せらるゝのであり、且つ陸侃如・游國恩等の言へる如く、其の詞句、果して相如の大人賦に負ふ處ありとせば、更に下つて、漢武以降にその作成年代を求む可きこととなるのである。

固より、大人賦・遠遊の本末關係は、嚮にも述べたるが如く、遽かに推定すべくもないのであるが、併し相如が、その曠世の賦才を武帝に知られて、「朕此の人と時を同じうするを得ず」との贅歎を受け、後の楊雄に欽仰せられて、「長卿の賦は人間より來らず、神化の至る處なり」と絶叫せられたるに察して、又更に下つて、明の王世貞が、相如と屈原とを駢稱して、「屈子の騷は騷の聖なるものなり、長卿の賦は賦の聖なるものなり」と評せるに見て、（注1、）此の一代の天才辭賦家の面目の爲に、私はここに暫く、大人賦を遠遊の以前に置かうと思ふ。況んや西京雜記には

「其友人盛覽、……忤名士。嘗問相如以作賦。相如曰、合羣組以成文、列錦繡而爲質、一經一緯、一宮一商、此賦之迹也。賦家之心苞括宇宙、總覽人物、斯乃得之於內、不可得而傳。覽乃作合組歌・列錦賦而退、終不復敢言作賦之心矣。」（注2、）

と述べて、相如の辭賦に對する見解の深厚なるを稱せるに於いてをや。

かく推測し來たれば、遠遊篇は、漢武以降、劉向・班固の間に作成せられたるものとなるのであつて、既に鄭賓于の推論せるが如く、或は漢武の頃の文人方士流の僞作と爲す可く、或は稍、下つて、王莽・劉歆時代の楊雄の模擬作と爲す可きであらう。（注3、）

特に王莽は、虚偽を以て聲望を博し、恭儉を假りて權勢を得、爲に世上悉く諂佞の俗を成し、道德地に墜ち、人心腐敗するの狀態を現出して、彼の所謂諂佞文學を生じたるに見れば、(注4、)後に莽に媚從してその大夫となりたる楊雄が、一代の儒宗を以て、其の巧麗なる文辭に、平常推尊して止むことなかりし相如の賦に模擬するの一篇を物さなかつたとは、容易に斷言し得ぬ處でもあらう。

寔に、相如の没後僅かに六十餘年にして生誕したる楊雄は、その天稟の甚だ相如に酷似せるのみでなく、その詞賦に於いては、専ら相如の風を模倣し、聽てその出處進退に至るまで、亦相如の轍を履みたるものの如くであつて、彼の前半生の詩人的生活は、全く相如欽仰の時代なりと云ひ得ることは、既に兒島博士の論ぜられたる處である。然らば博士が彼を評して、「蓋し彼は相如の賦を模擬するを以て詩人の能事畢れりと爲し、相如の文に形似するを以て無上の名譽と爲すものの如し。」(注5、)といはれたるに見ても、又彼がかく相如を推尊しつゝ、遂にその右に出づる能はざりし事實に察しても、或は楊雄こそ、遠遊の僞作者には非ずやと思はるゝのである。

併し、かくの如きは、固より一個の皮相なる想像説に過ぎざるものであつて、遠遊の作者及びその作成の時代に就いては、遂に明確なる論證を下し得ざる現状である。

かくてこゝに私は、「遠遊」を後人の僞作と推定しつゝも、之が作成の時代に至つては、唯、漢武以降、劉向班固の間にある可し、と推測するのみであるが、併し以上の如く、「遠遊」を後人の僞作と認むることに依つて、私は之を屈賦の圈外に置き得ることを喜ばなければならぬ。

(注1、) 兒島獻吉郎博士著「支那文學史綱」第三篇第六章參照。

(注2) 游國恩著「楚辭概論」第三篇第九章引。

(注3) 鄭賓于著「中國文學流變史」上冊、第二章第二節、二、E、參照。

(注4) 兒島博士「支那文學史綱」第三篇第八章參照。

(注5) 同前、第九章引。

姜嫄傳說臆斷

渡 邊 末 吾

大雅生民の首章に曰く、

厥初生_レ民、時維姜嫄。生_レ民如何、克禋克祀、以弗_レ無_レ子。履_ニ帝武敏_一、歆攸_レ介攸_レ止、載震載夙、載生載育、時維后稷。

と。是れ詩_{頌商}に依りて知り得る最古の傳說なり。此の詩の制作年代が最古なりと言ふにはあらず。傳説の内容最も古きなり。而て姜嫄の後稷を生むに

至りし經緯に關しては毛詩と三家、その説を異にす。毛傳を檢するに曰く、

姜、姓也。后稷之母、配_ニ高辛氏帝_一焉。去_レ無_レ子、求_レ有_レ子。古者必立_ニ郊禴_一焉。玄鳥至之日、以_ニ大牢_一祠_ニ于郊禴_一。天子親往、后妃率_ニ九嬪御_一、乃禮_ニ天子所_レ御_一。帶以_ニ弓鞬_一、授以_ニ弓矢_一、于_ニ郊禴之前_一。孔疏云、弓矢者男子之事、使之帶_ニ弓衣_一、執_ニ弓矢_一、冀_ニ其履、踐也。帝、高辛氏之帝也。武、迹。敏、疾也。從_ニ於帝_一而見_ニ于天_一。將_レ事齊敏也。歆、饗。介、大

所_レ生爲_レ男也。